

大学はどう変わっているか

個性化、多様化進む 大学設置基準の大綱化の影響などを受け、今後、大学の個性化、多様化がますます進むと考えられる。それぞれ中身を把握し、より自分に合った大学を見つめることが生徒に求められる。

制度上の工夫も様々に 大学の個性化、多様化はそれぞれのカリキュラムの内容や、それをよりよく機能させるための制度上の工夫として現れている。カリキュラムから大学の特色を読み解くことが求められる。

大学院進学が重要に 理系の学部・学科を中心に、学部教育を受けた後、より高度な研究に取り組むために大学院に進学する学生が急増している。大学院設置の有無、進学状況も各大学によって様々なのが実情だ。

今、大学は確実に変わりつつある。ではその変化を前に、高校生に求められる大学研究の具体的な視点とはどんなものか？

変わる大学、深まる大学研究

2 大学研究をどう進めるか

研究の目的を理解させる 生徒は合格できそうな大学や、自分の知っているごく一部の大学のみが目向きがち。幅広い視野で自分に合った大学を探すことを伝える。

具体的視点を持たせる 大学研究では人口、中身、出口の3つの視点が欠かせない。それぞれ何をどこまで調べるかを生徒に確実に理解させることが求められる。

大学院進学を視野に 特に理系の生徒には、大学院進学的重要性と共に、大学院進学の仕事内容を説明し、大学研究でも大学院の存在に配慮することを求めたい。

研究成果を共有化する 生徒の視野を広げるため、研究の過程やその成果の発表で、グループでの活動を積極的に取り入れたい。これにより、仲間意識の醸成も期待できる。

大学はどう変わっているか

学部の変化

刻々と進んでいく 大学教育の個性化、多様化

ますます高まる 大学研究の重要性

政策科学部や環境情報学部、医療福祉学部……。つい十年前までは、耳にすることさえ珍しかった名称の学部が近年、様々な大学に設置され、これらの学部を志望する生徒が着実に増えている。その結果、「学問、学部の多様化と共に、生徒の進路希望も変化に富むようになり、適切なアドバイスをするのが難しい」という声も聞かれる。

新しいタイプの学部の登場だけではなく、既存の学部においても、カリキュラム改革など、個性的な特色を打ち出すようになっってきた。

このような大学の個性化、多様化が進んだきっかけとしては、91年の文部省による大学設置基準の大綱化が挙げられる。従来の大学設置基準では、大学を運営していく上でのカリキュラム

や卒業要件などの基準が細かく決められていたが、大綱化で規制が大幅に緩和された。それにより大学が、個性を生かして自由にカリキュラムを組むことが可能になったのだ。

これまで日本の大学は、専門教育機関としての役割を重視していた。だが高校生の2人に1人が大学、短大に進学する今、学生たちは必ずしも専門的な学問や高度専門職業教育を求めている者ばかりではない。「社会に出る前に幅広い教養を身に付けたい」とか「自分が何をしたいかを見つげるため」に進学する学生も増えてきた。こういった学生の多様化に対応する大学も増えている。

したがって、生徒に大学研究を通して各大学のカリキュラムの特徴、教育方針を把握させておくことが、これまで以上に重要になっている。しかも、「どんな人材を養成することを目的としてカリキュラム改革を行ったのか」「その改革を実践していくために具体的にど

んな工夫をしているのか」についてまで、できれば把握させておきたい。

突き詰めて 学ぶのが 幅広く学ぶのが

では、大学は実際にはどのような多様化しつつあるのだろうか。例えば、大学審議会は98年10月に提出した答申『21世紀の大学像と今後の改革方策について』の中で、これからの大学の姿について次のような具体像を示している。「各大学は、それぞれの教育研究についての理念・目標を明確にし多様な個性化を進めると共に（中略）、高等教育全体のシステムの中でどのような独自の役割を果たすのかを学内外に明らかにする必要がある。その結果として、それぞれの理念・目標に基づき、例えば、総合的な教養教育の提供を重視する大学、専門的な職業能力の育成に力を置く大学、地域社会への生涯学習

機会の提供に力を注ぐ大学、最先端の研究を志向する大学、また、学部中心の大学から大学院中心の大学など（中略）、多様かつ個性的な目的・特徴と独自の存在意義を持ちながら教育研究を展開していくことにより、大学全体として社会の多様な要請等にこたえていくことが可能となる」

このように、言わば各大学の社会における役割も将来的には分化していくと思われるが、高校生が行う大学研究においては、現状のカリキュラムの方向性（具体的な内容構成）から考えさせるのが取り組みやすいのではないだろうか。各大学の方向性を見極め、その特色を具体的に把握することが、大学研究のポイントになる。

各大学のカリキュラムは、1つの学問分野を突き詰めて学ぶ構成と、1つの学問分野にとどまらず幅広く学ぶ構成とに大きく分けられる。さらに各大学によって、「専攻分野の本格的な研究

大学のカリキュラムの分類例

スペシャリスト志向

- ・専攻分野の本格的な研究は大学院で行い、学部段階では主に基礎知識の習得に力を入れる
- ・教養科目を軽減して、1年次から専門性の高い科目を増やす
- ・教養教育と専門教育が効果的に接続するように、講義内容に工夫を凝らす
- ・専門分野だけでなく副専攻も幅広く学べる
- ・総合的な教養教育を重視する

ゼネラリスト志向

は大学院で行い、学部段階では主に基礎知識の習得に力を入れたカリキュラム「教養科目を軽減して、1年次から専門性の高い科目を増やしたカリキュラム」、教養教育と専門教育が効果的に接続するように、講義内容に工夫を凝らしたカリキュラム「専門分野だけでなく副専攻も幅広く学べるカリキュラム」総合的な教養教育を重視したカリキュラム「などに細分化できよう。

カリキュラムの特徴に大学の方向性を見いだす

まず「学部段階では(専門分野の)基礎知識の習得に力を入れている」のは、大学院進学率が高い理系の大学に多く見られる。理系の場合は実質上、本格的な研究は大学院に入ってからという状況になりつつあると言えるだろう。

「1年次から専門的なカリキュラムを展開している」大学は、医療福祉系や情報系など、高度専門職業人の養成を目指した単科大学に多く見られる。

「教養教育と専門教育の効果的接続を目指したカリキュラムを実施している」大学としては、例えば群馬大が挙げられる。同大学では教養科目の構成

特徴あるカリキュラムを円滑に進めるために、各大学は制度面での様々な工夫を行っている。質の高い教育を実践している大学を把握するためには、各大学の取り組みを検証しておくことも重要になる。

教育制度の工夫・改善の手法として代表的なものに、セメスター制の採用、シラバスの作成、ティーチング・アシスタント(TA)の活用などがある。セメスター制とは、1年を前期・後期の2学期に分け、各学期ごとに科目を履修して単位が取得できるシステム。1つの科目を1年間で学ぶ従来のやり方だと、途中で長期休暇などが入ることと授業が間延びする弊害があった。その点セメスター制は、1科目につき週2回の授業が行われることが多く、短期集中で勉強ができる。また、興味・関心の変化に応じた方向転換もしやすい。さらに欧米の大学でもセメスター制が一般的なため、留学先との単位互換、単位認定もスムーズになる。セメスター制を導入する大学はここ数年で急増しており、97年度の文部省の調査では7割の大学が実施している。

を「全学共通」「学部共通」「自由選択」の3チャンネル制に編成、学生は「全学共通」で大学の教育理念に沿った科目、「学部共通」で学部の教育理念に沿った科目、「自由選択」で学生の希望と能力を重視した科目を履修する。このうち教養教育と専門教育の架け橋の役割を果たすのが「学部共通」科目である。各学部ごとに、専門科目を勉強するためにこれだけは身に付けて欲しいという内容を盛り込んで科目を設定している。

「専門分野だけでなく、副専攻も学べる」大学としては立命館大や京都大総合人間学部などがある。立命館大は各学部での専門教育とは別に「環境マネジメントコース」「教育学コース」「中国語コミュニケーションコース」などの副専攻を設置。各学部での専門教育

社会環境の変化と大学教育

- ・国際化への対応 - 従来から行われてきた交換留学に加え、1年程度の海外研修をあらかじめ単位に組み入れている大学も増えてきた。また、セメスター制を導入した大学が増えたため、海外留学による留年を心配する必要が少なくなった。
- ・情報化への対応 - 学生一人ひとりにノート型パソコンを携帯させ、インターネットや学内LANにアクセス可能な情報コンセントを学内全域に設置する大学も誕生している。また、情報処理教室を開放し、学生が自由にパソコンに触れられるようにしている大学も多い。
- ・実学志向への対応 - 不況の影響から、企業は大学に即戦力となる人材を求めるようになってきた。そこで、実業界のトップを招いた講義を行ったり、企業に学生をインターンとして派遣して社会経験を積ませるなど、実社会との連携を図り始めた大学もある。

大学研究のポイントとなる各大学の教育制度上の工夫とは？

また筑波大など一部の大学では、2学期制ではなく3学期制を採用している。

学生が、本人の研究テーマや興味・関心に適合した科目を履修

するためには、あらかじめ教員が授業の内容を詳しく提示しておくことが不可欠である。そこで重要度を増しているのがシラバスである。シラバスとは、講義目的・概要、毎回の授業内容、成績評価方法、教科書や参考文献などを詳細に示した年間授業計画書。シラバスを作成している大学は、94年度は176大学だったが、97年度には全体の92%に当たる538大学に増えている。国際基督教大では、シラバスに変更が生じたときにすぐに学生に通知できるように、インターネットで各授業の計画が読めるシステムを構築している。また南山大のように、受験生向けシラバスを発行する大学も登場してきた。

TAとは、大学院生が教員のアシスタント役として、学部生の実験・実習・実技指導やゼミ指導に当たるといったもの。東京理大など280大学でTAが活用されている。学部生にとっては、実

と副専攻を効果的に結び付けることで、例えば「環境問題に詳しい法律の専門家」の育成ができる環境を整えている。一方、京都大総合人間学部には、「文明論講座」「情報科学論講座」「生物・地球環境論講座」など全部で13の講座があり、学生は専門の講座の他に、副専攻の講座も履修することになっている。これは専門以外の分野にも深い知識と素養を身に付けることを目的としたものだ。

「総合的な教養教育を重視したカリキュラムに移行していく」大学は、大学の多様化が進むに連れ今後さらに増えていきそうだ。教養科目を2年次以降にも数多く配置しながら、常に幅広い観点から課題にアプローチする能力を身に付けた人材も今後必要とされるからだ。

現代社会の状況に対応したプラスαの教育体制も

さらに大学の中には、専攻学問の教育に加え、国際化や情報化などの現代社会の流れに対応した教育に力を入れる所も増えている。

従来、大学の語学教育は、何を目的として学ぶのかがはっきりせず、お座り。また日々の授業とは別に、資格取得支援などの講座を開講する大学が増え、学生は、学生の知識、技能を高めるための仕組みとして見逃せない。例えば、専修大は学生のためにエクステンションセンターを開設、「司法試験受験対策講座」「公務員試験講座」「TOEFL講座」などを開いている。

教育の質を高めるための取り組み

また日々の授業とは別に、資格取得支援などの講座を開講する大学が増え、学生は、学生の知識、技能を高めるための仕組みとして見逃せない。例えば、専修大は学生のためにエクステンションセンターを開設、「司法試験受験対策講座」「公務員試験講座」「TOEFL講座」などを開いている。

各

大学が独自のカリキュラムを備えているものとして実践していくためには、これらの制度を導入して、しかも効果的に運用していくことが条件となる。例えばいくらカリキュラムが立派でもシラバスが貧弱では、学生は的確な学習計画を立てられない。教育理念に基づいたカリキュラムが確立され、次にそのカリキュラムを進めるための具体的な工夫がされているか、という視点を持って、大学研究を行うことが求められる。

なりになりがちな面があった。だが近年は国際化に対応するため、ネイティブスピーカーの活用や能力別クラス編成など、使える語学力の養成を目指し改革に踏み切る大学が目立つ。例えば立教大は97年度より、それまで1、2年次に各2コマあった英語の授業を1年次4コマとして、短期集中で英語力アップを目指すカリキュラムに改編した。授業はほとんどが英語で進められ、さらに2年次から希望者を対象に、より本格的な語学教育を学べる自由選択科目を設け、TOEFL550点から600点レベルの授業が行われている。また情報化への対応としては、情報処理科目の充実や専用教室の設置が挙げられる。特に有名なのは慶応大湘南藤沢キャンパス(総合政策学部 環境情報学部)で、学生は低学年次にコンピュータの運用方法を習得、学内には24時間利用可能なワークステーションがあり、レポートの提出、資料の入手などに活用されている。

このように大学は、確実に個性化、多様化の方向へと進んでいる。似たような学部名で同じ難易度の学校群でも、どの大学に入学するかによって、学べる内容、将来の進路は大きく変わるようになる。大学研究の重要性が、ますます高まっていることは間違いない。

カリキュラムの多様化と入試制度の多様化

大学のカリキュラムが多様化したということは、4年間の教育目標や学生に求める資質などが、大学によって異なる時代がやってきたことを意味する。大学は、自分たちの教育目標に適合した学生を確保するために、入試制度にも工夫を凝らすようになっていく。推薦入試は客観的な学力評価だけに留まらず、学生の資質や志望理由などを見ながら選抜できる入試として、そのウエイトは多くの大学で高まっている。2000年度入試からは、4年制大でも入学定員の5割までを推薦入試で選抜することができるようになった。そして、推薦入試よりもさらに時間をかけて、多角的に学生の課題発見・解決能力や学問への意欲を見る試験として、AO入試が注目されている。学力試験によらず調査書や志望理由書などから、その受験生が本当にその大学、学部に向いているかどうかを判断する。AO入試の実施例としては慶応大湘南藤沢キャンパスが有名だが、2000年度入試からは国立大でも東北大、筑波大、九州大で導入され、さらに拓大が予想される。

また、国立大で小論文、総合問題、英語のリスニング、面接などを課す所が年々増加している。教科別の学力だけでなく、大学で求められている「論理的な思考力」「表現力」「意欲・適性」などを重視しようとする傾向が見られる。

変わる大学、深まる大学研究

特集

専門性を持った 大学院卒者が 求められる時代に

大学院への進学者はここ数年で急増している。'91年度までは修士と博士を合わせて10万人に満たなかった大学院の在学者数は、'99年度には約2倍にまで増加した。特に理系学部での増加は顕著で、京都大工学部、大阪大理学部、名古屋大工学部、東京工大工学部・理学部のように、大学院進学率が7、8割を超えている所もある。

大学院在学者数の推移（人）			
'90年	90,238	'95年	153,423
'91年	98,650	'96年	164,350
'92年	109,108	'97年	171,547
'93年	122,360	'98年	178,901
'94年	138,752	'99年	191,125

文部省『学校基本調査報告書』より。

主な学科の大学院などへの進学率

（'98年3月卒者）

人文科学系学科	4.1%
社会科学系学科	1.9%
理学系学科	33.6%
工学系学科	24.2%
農学系学科	20.0%
教育学系学科	7.9%

文部省『学校基本調査報告書』より。

ますます強まる 大学院進学的重要性

このように大学院進学者が増えている背景としては、科学技術の急速な進歩により、学部の4年間だけでは十分に教育・研究しきれなくなったため、高度な専門教育・研究は大学院に求めよとする発想がある。大学審議会の答申「21世紀の大学像と今後の改革方策について」でも「学部教育では、専門的素養のある人材として活躍できる基礎的能力等を培うことを基本とする。一方、専門性の向上は大学院で行うことを基本として考えていくことが重要となる」というように、学部段階と大学院に求める役割の違いを定義している。実際、各大学のカリキュラムを見ても、学部段階では基礎的な専門知識の習得に主眼を置く大学が増えている。

このよつな状況の中で、より本格的な研究を希望する学生は、大学院進学を目指すよつになつていふ。あ

国立大工学部の学生も「学部段階だと、きちんと研究に取り組めるのは4年生での1年間だけ。これでは中途半端で十分な成果が得られないから大学院に進む」と語る。

一方、学生の将来の進路先に当たる企業の側も、特に理系の研究職については大学院卒であることを重視する傾向が強まっている。ある大手製薬会社の人事担当者は「研究者は修士以上が条件となっています。単に薬学部卒というだけでは研究職には就けません。これは他の会社でも同様だと思います」と現状を語る。

大学院への進学率は、今後は理系ばかりではなく文系においても高まることと予想される。社会や経済の複雑化に伴い、官庁やシンクタンクなどで専門的な職務に就く人に対しては、より高度な専門知識や技能が求められるよつになつていふためだ。既に欧米の文系の大学院では、高度専門職業人の養成が大きな教育目標の一つとなつてい

る。日本もやがては欧米型へと進んでいくことは、ほぼ間違いないだろう。

大学院の 特徴を知る ポイントを提示

だが、大学院拡充が進んでいると言つても、すべての大学が同じ方向を向いているわけではない。前述のように、大学は「総合的な教養教育を重視した大学」「最先端の研究を志向する大学」というよつに多様化しつつある。もし高校段階で大学院進学を視野に入れた進路選択をするなら、大学院重視を打ち出している大学を選ぶことが大切になる。ちなみに今のところ大学院重点化施策を表明している大学は、東京大や東北大など旧帝国大グループが多い。また、大学院は学部以上に研究テーマに違いがあることにも気付けたい。

学部は学生に対する教育機関でもあり、専攻領域をある程度幅広く学ぶが、大学院は研究機関であり、所属する研究室の教員と共に研究に没頭する場となる。入学定員が増えている大学院は、研究内容が今後幅広くとなると考えられるが、かなり研究内容を絞り込んだ上での大学院に進学するかを決めなければならぬことは変わらないだろう。

大学院によっては研究センターを併設している所もある。例えば、京都大は「東南アジア研究センター」「アフリカ地域研究センター」を設置、それぞれ地域の専門家が歴史、地理、自然などの研究を総合的に進めている。また、最近では企業と共同して研究に当たる産学共同センターを設置する大学院もある。産学共同で研究が進められる場合、研究費の補助や企業のニーズに合った実学的研究に携われるというメリットが考えられる。このような研究センターの存在も、個々の大学院の特徴を知る上でのポイントとなるだろう。

学部を卒業した後には他大学の大学院へ進学する学生も約3割いるが、現状では学内出身者が大半を占める大学院の方が多し。したがつて、高校での学部選びの段階から、研究したいテーマがあり、かつ大学院が充実している大学を選んだ方が無難であると言えるだろう。だが、現在でも他大学出身者の占める割合が5割を超える所もあり、また北陸先端科学技術大学院大学などのよつに、学部組織を持たず大学院のみを設置している所もある。今年7月の大学審議会答申でも他大学出身者が不利にならない入試方法が提言された。今後大学院進学率が高まるほどに、大学院の選択肢はより増えていくだろう。

大学院進学現状

なぜ学生は大学院に進むのか？
— 学部と大学院とは、何が一番違つたのでしょうか。

小川 卒業研究で説明するところが違います。私の所属する学科では学部4年次の卒業研究は教授がテーマを設定して、学生はそれに沿つて実験をしてデータを出してまとめるんですね。実験結果も教授の側は大体予測が付いていふ。それが修士論文研究や博士論文研究になると、社会的にも学問的にも意義があり、最終結果も予想がつかない課題に取り組みます。テーマを選択するのも学生自身です。

つまり教授の指導の下に知識を吸収するのが学部段階で、大学院ではもっとクリエイティブな課題にチャレンジすることになるわけですね。— 東京工大の、学部から大学院への進学状況を教えてください。

小川 本学では約7割の学生が院に進んでいふ。ただし学科によつてはらつきがあり、工学部で言うと機械系は6割程度ですが、応用化学系だと約8割にもなります。

実はこの差は産業界からの要請に対応しているんです。応用化学分野は変化が速く高度先端化していることもあり、企業側が修士課程修了以上の人材を望むんですね。一方、ベーシックな知識を持つている人材を求めている分野では学部卒者に対するニーズもまだ高いです。

他大学からの進学は不利か？
— 大学院生のうち、他大学の学部出身者の割合はどのよつになっていますか。



小川 研究科によつてかなり異なります。本学の理工学研究科は内部進学者が7、8割ですが、総合理工学研究科だと他大学出

東京工大工学部長 小川浩平教授

身者の方が多しといふ。これは理工学研究科がその下に工学部と理学部があつて学部と接続しているのに対し、総合理工学研究科は基礎に学部・学科がない大学院独立研究科だからなんです。うちの大学から総合理工学研究科に進学する者も、理学部、工学部、生命理工学部卒者と様々だし、同時に他大学から集まつてくる学生もたくさんいるといふわけですね。

— 他大学の学部からの進学は、内部進学に比べて難しい面はないのでしょうか。

小川 確かに以前は本学にも、大学院の定員の約半数を本学の学部生のうち優秀な者を無試験で進学させる学内推薦制度というのがあつたので、他大学の学生は不利でした。

でも、今は東京工大に限らず、そういうことは少なくなつてきていると思います。特に大学院重点化を打ち出している大学は定員数を増やしており、優秀な人材を外部から入学させなければ質を維持できなくなつていふからですね。

— 入試の面でも今はハンディキャップはありますか。

小川 私の感覚で言えは、約4割は入学当初から修士進学を決めていますね。残り、先輩の話や聞いたり社会の状況を知つたりする間に自分の進路を決めているよつです。高校生のうちに、進学しようとしている大学に院があるかどうか、規模はどれくらいかという程度は調べておいた方がいいでしょうね。

しかし何より大学院に進むとなると、少なくとも6年間はその学問に取り組むことになるわけですから、大学院に向けて自分の興味・関心に合つたジャンルを選ぶことが肝心です。

東京工大大学院生が語る大学院進学

寺岡豊和さん

理学研究科機械工学専攻修士課程2年 内部進学

阪井則雄さん

理学研究科電気・電子工学専攻修士課程2年 内部進学

クニナ・ピー・イエさん

理学研究科化学工学専攻修士課程1年 内部進学

○大学院進学はいつ頃から考えていましたか

（寺岡）僕は高校時代から大学院にまで進もうと思つていました。父親の知人に理系出身の方がいて、「工学部に入らなれば修士課程まで」と言われていたからです。両親にも、早くから院まで進むつもりであることを告げていました。

（阪井）僕は大学入学当時はそれほど意識していませんでした。サークルの先輩や友達と話すうちに院に進学しようという気持ちになりました。そもそも院の情報で、高校の時点ではそんなに入つてきませんでした。でももう少し院や研究室のことを調べておくべきでした。今僕は電気系を専攻しているのですが、自分の興味とびつたり一致する研究室を初めは見つけられなかつたんです。最終的には満足いく研究室を見つけたことは良かったです。

○大学院入試の情報収集はどのようにされましたか

（寺岡）先輩から具体的な進路傾向を聞きました。その点は学内進学の方が有利です。

（クニ）試験問題は基本的に学部生時代に勉強した中から出されます。確かに学外の方は、情報収集も入試対策もせよからやらなくてはならないので大変かも知れませんが、

○今の生活パターンは？

（阪井）学部生の頃は授業が終わりればすぐに帰宅していましたが、今は昼前にやつてきて、研究が一段落着くまで研究室にもつていふ。家に帰るのは夜の11時くらいです。

（クニ）私も、研究室は番（二）の自室のような状態になっています。院生にとっては研究室がすべての生活のベースになりますから、研究室選びは慎重にした方がいいと思つていふ。

特集

変わる大学、 深まる大学研究

生徒に大学を多角的に 考えさせる場を作っていく

大学研究の目的を伝える

広い視野で 自分に合った大学を 見つけさせる

一般に高校2年次後半から3年次にかけて行われる大学研究は、生徒が最も自分に合った大学を自分の力で見つけていく作業である。同じ学部名称でも、大学によって学問の中身や研究テーマが異なるため、それまで興味・関心を基に職業、学問(学部・学科)について考えてきた成果を踏まえ、自己実現のための最適な場所を探していく必要がある。また、最近増えてきた推薦入試やAO入試においては、志望理由(意欲)などが重視されるため、大学研究を進め、大学の中身を十分に理解した上での出願が特に求められている。

だが、入試を意識し始めるこの時期の生徒は、ややもすると現状の成績から「合格できそうな大学」にばかり目

大学院が設置されていることが望ましい。これらも大学案内などを使って必ず調べさせたいテーマだ。

中には、志望校には適当な大学院が設置されていないという生徒もいる。しかし、だからと言って即座に志望校を変更するのは早計だろう。当然、他大学の大学院へ進学することも不可能ではないし、大学によっては他大学の大学院に多くの学生を送り出している所もある。特に、最近では大学院の重要性が叫ばれ、大学院の定員が増え、学部を持たない独立大学院も設置されているからだ。今後は、他大学からの大学院進学も徐々に容易になっていく方向性であることも伝え、生徒には慎重に判断させたい。

ただし、大学院研究の際に注意させたいのが、大学院の研究レベルは学部の難易度と必ずしも関係しないということ。一般に、学部段階に比べると大

が向いてしまいがちだ。もちろん、入試制度や難易度も大学研究の重要なテーマの一つだが、何より「入学したい大学」を見つけ、その目標に向けて努力を重ねていくことに意味があることを伝えたい。

また、生徒は地元の大学や大都市の有名大学など、思いのほか限られた大学しか知らないことも多い。しかし、大学進学は卒業後の人生を形作っていく礎ともなるので、できるだけ広い視野を持ち、多くの選択肢の中から志望校を見つけていくことが重要であることを生徒に理解させたい。

研究の視点を具体的に提示する

入口、中身、 出口の3つを 調べさせる

大学研究では入口、中身、出口の3つ、つまり入試の内容、入学後の研究内容と学生生活、卒業後の就職・進学

学院は小人数教育ということもあり、より教員との結び付きが強くなる。興味・関心のある研究科にどんな研究室が設置されているか、その研究室の教員はどんな実績を挙げているか、さらには研究活動を支えるための施設や設備が整っているかといったことが大学院研究のポイントになることを生徒に理解させたい。

高校段階で、大学院での研究テーマまで絞り込むのは難しいだろうが、目的意識のはっきりしている生徒には、大学院に目を向けさせることでより進路意識が高まるはずだ。

大学院に関する情報収集は、大学に比べると困難である。一部、大学院の情報専門に扱った市販書もあるが、大学院に関する生の情報を持った人が高校を訪れた機会(卒業生との相談会や大学教授による学問講演会など)を逃さずに活用している学校が多いよう

研究の成果を共有させる

グループ研究や クラス発表で知識を 広げ、深めさせる

大学研究では、一人ひとりの生徒が調べて得た知識をさらに重層化させ、

状況を具体的に生徒に調べさせることが必要だ。

この中で最も時間を要するのが大学の中身の研究である。もちろん、学問(学部・学科)に関する一定の理解は、学部・学科研究において得られているはずだ。だが、同じ名称の学部・学科でも大学ごとに研究内容は異なってくる。大学案内やシラバスなどを活用して、教授陣の概要、講義や講座(ゼミ)の内容、施設・設備の充実度などを調べさせたい。最近では多くの大学がホームページを開設しており、そこから各ゼミの研究内容などを知ることができる。

講義などの内容と共に、各大学のカリキュラム上の特徴や制度の把握も重要。セメスター制の有無や他学部の講義履修の可否、チューター制、交換留学の状況などは、開講されている一つひとつの講義を有機的に機能させるものである。大学案内などで生徒個々に調べさせる前に、これらの制度につい

大学研究の方法例

- ・『学べる大学探せる事典』(ベネッセコーポレーション刊) 関心のある学問分野から、学べる大学、学部・学科を探ることができる。
- ・大学別の過去入試問題集 いわゆる 赤本 などには、過去の入試問題に加えて、その大学の簡単なプロフィールなどがまとめられている。
- ・大学案内、シラバス 現在、シラバスはほとんどの大学で発行されている。志望者の多い大学については、高校に1冊常備するように、毎年請求するとよい。
- ・「FINE system」などのパソコン活用 ベネッセコーポレーションのFINE systemはインターネットに接続されており、各大学のホームページにもリンクしている。また、「大学生から見た大学」を中心として大学の生の情報を掲載している。
- ・オープンキャンパス 主に夏休みに実施されるオープンキャンパスでは、学内の見学だけでなく、教授による模擬講義が開かれるケースもある。
- ・各地で実施される大学説明会 (ベネッセコーポレーション主催「マナビジョン」など。詳細は本誌P.62) 大学が単独で、または複数共同で実施する大学説明会は、オープンキャンパスに参加できない遠方の大学のの中身を知る貴重な機会と言える。
- ・大学祭 大学の生の雰囲気を知るよい機会。特に、ゼミやサークルなどの研究発表会などに注目させたい。

視野を広げるためにも、研究、発表などの段階で生徒同士の共同作業を盛り込むのも一案だ。

まず、研究の段階で生徒をグループに分けて行う方法。複数の目で調べることで、より幅広い研究が可能になる。なお、このグループ分けに当たっては、2つの考え方があり、1つは同じ大学を志望する生徒を集めるやり方だ。この場合、研究の成果を共有しやすいし、同じ志望校に対する熱意が相互に刺激し、仲間意識、よい意味でのライバル意識が生徒間に生まれることが期待できるだろう。

そしてもう1つは、大学にこだわらず同じ学部・学科を志望している生徒をグループにする方法。この場合、研究成果はそれぞれの生徒が自分の志望校についてまとめていくことになるが、同じ、または似たような学部・学科名

で説明しておくとういだろう。さらに、立地、環境、学費など、学生生活にかかわる視点も忘れないようにさせたい。入試の内容については入試日程・方式、入試科目、難易度(現在の学力との差)などをチェックさせる。いま履修している科目で受験可能かを確認し、入試本番までに何をどれくらい学習しなければならぬのか、現在の学力をあとどれくらい伸ばさなければならぬのかを把握させる。そして、卒業後の就職・進学状況では、就職先や進学実績(どの大学院にどれくらい進学しているか)などを調べさせるとよい。

大学院進学を視野に入れさせる

志望校における 大学院情報も 調べさせる

特に理系志望の生徒に対して、研究職などを志望する場合は大学院進学がほぼ不可欠であることを理解させておく。現在では大学院には同じ大学の学部から進学する方が、他大学からの進学よりも有利とされている。大学によっては学内推薦制度を設けている所もあるし、選抜試験の傾向などの情報収集も容易であるからだ。したがって、志望校に学部段階の研究を継続できる

でも大学によって研究内容やカリキュラムには特徴や違いがあることを比較することで理解しやすくなり、結果的に他者の知識を吸収しながら、志望校選択の視野を広げることができる。次に、研究の成果はレポートなどにまとめ、発表させる機会を持たせることで、さらに視野を広げさせたい。研究、発表共にクラスの枠にこだわらずに、学年を横断して行うとグループの編成も多様になる。また、学年挙げての取り組みは学校全体から注目されるため、下級生の進路意識を刺激する効果も期待できる。

特集

変わる大学、 深まる大学研究

大学研究のテーマ例

- ・その大学の沿革
- ・その大学の学部・学科で自分がやりたい研究
- ・興味を持った講義、ゼミ
- ・興味を持った教授の研究テーマ
- ・カリキュラムの特色
- ・研究に利用できる施設・設備
- ・大学周辺の環境
- ・就職者の多い業種、職種、企業
- ・取得可能な資格
- ・設置している大学院の研究内容
- ・入試日程・方式、入試科目・配点、難易度
- ・入学金、授業料
- ・サークルなど、その他興味を持った事柄